

2

[報告 | report]

ICAが考えるアーカイブズとは

『情報社会におけるアーカイブズ、記憶、そして民主主義』の紹介

What is a ICA's View of Archives:

Introduction of ARCHIVES, MEMORY AND DEMOCRACY in the Information Society

葉袋未夏 | Mika Minai

このDVDは国際アーカイブズ評議会(International Council on Archives=ICA, 以下ICAとする)が作成し、アーキビストへのインタビューを編集したものである[1]。情報社会におけるアーカイブズ、記憶、そして民主主義の関わり方、果たすべき役割、課題、今後のあるべき姿への提案などについて簡潔に述べられており、アーカイブズ学を学んでいる者にとってももちろん、アーカイブズ学入門者でも分かり易い構成となっている。本編は以下の7つの章から成り立っている。そのそれぞれの章について具体的に紹介していきたい。なお、本DVDの言語はフランス語であるが、字幕では、フランス語と英語とドイツ語が選択できるようになっている。海外文献を講読する本専攻の授業(アーカイブズ学理論研究Ⅲ)においては、英語字幕で鑑賞をした。今回はその内容を日本語に訳して紹介するが、執筆者が学部時代、ドイツ語文学文化専攻に所属していたため、ドイツ語字幕の視点からも捉えたコメントも加えたい。なお、本DVDの構成は以下の通りである。

[構成]

- 序章 記録とアーカイブズとは何か?
- 1章 記録のライフサイクル

- 2章 長期保存の危険な状況
- 3章 情報技術の挑戦
- 4章 現用記録の管理
- 5章 アーカイブズと民主主義: 普遍的な問題
- 終章 結論

1 —— 各章の紹介

序章では、「記録」というものと、「アーカイブズ」というものは、それぞれ何を指しているのかということ述べている。「記録」とは毎日の業務の過程の中で、全ての政府や組織が生み出したものであり、これらは時代を越えて利用されたり、直ちに利用される証拠となる。一方、「アーカイブズ」とは、過去の資料という意味で捉えられることが多いが、常に権力と結びつき、権力の行使に用いられるものであると定義している。権力と結びついているという点は忘れがちであるが、アーカイブズの目的の重要な点の一つであることを具体例を示しながら述べている。例えば、土地所有権を証明するためには地籍図が保存され管理されることが必要であることを示している。

また、記録管理は複雑な仕事であり、それは先ずいで厳密なやり方を要求する(Records management is a complex

task, which primarily requires a rigorous approach.）」という意味で英語では述べられているが、ドイツ語では、それは体系的なやり方を要求する(Die Archivführung ist eine komplizierte Angelegenheit, die eine systematische Aktenführung erfordert.）」という意味で述べられており、ニュアンスの違いが若干見られた。

1章では、記録のライフサイクル(the records' life cycle)というものが生み出されてからの3段階のステージについて述べられている。その3段階とは、毎日の仕事の基礎として使用される「現用記録」、毎日は必要とされないため、レコードセンターなどに収蔵されている「半現用記録」、そして長期保存が要請された「非現用記録」である。このようなライフサイクルを経てアーカイブズとして保存されていく資料(原文では documents)は生み出された時の3%から7%とされている。

このように、記録というものは3段階のライフサイクルがあり、それぞれのステージでは、違う役割を果たしていることが伺える。しかし、この3つのステージへの移行は、一定の時間が経過した文書が丸ごと次のステージに行くのではなく、次のステージに行く際に「評価選別」という、どの文書を残し、どの文書を廃棄するかという判断が行われる。その判断がどのようになされるのかという点についてはもう少し具体的な言及が欲しかったように思う。

2章では、まずは長期保存の機能についての説明から始まる。長期保存の重要な機能は、「真実の痕跡を、時を越えて保存し、いつか他の時点であるいはそのほかの方法でそれが表明できるようにする」という言葉でまとめられている。これは的確な表現であると思われる。「記録とアーカイブズとは何か?」の параグラフで述べたように、アーカイブズとは単なる過去の資料ではなく、現在、そして未来にたいしても役割を果たすものである。従って、価値ある資料を長期間保存することが大切であることは既に説明された通りであるが、この章ではもう一つ長期保存をすることの重要な点を指摘している。それは「真実の痕跡」という言葉に表されているように、アーカイブズには、将来に向かって現在の真実を証拠として残すという重要な機能がある点である。このDVDでは述べられていないが、アーカイブズ学上では、「説明責任(accountability)」や「透明性(transparency)」という言葉が頻繁に使用される。長期保存の機能は、未来に向けて真実を説明するための責任を果たす重要な機能がある。

長期保存の危険な状況として、資料の虫損や破損が大切な記録を壊してしまう恐れを指摘している。保存の状況や

使用された紙の状況によって資料に劣化が生じてしまうことは常に危険視されている。少しでも劣化の進行を防ぐために、現在では様々な保存処置が施されている。今回は簡単な事例しか紹介されていなかったが、保存という作業は将来資料が見られなくなる危険性を防ぐ、アーカイブズにとって重要な作業であるため、具体的な実践例が示されていると更に良かっただろう。

3章では、情報技術の発達がアーカイブズに与える影響について紹介されている。情報技術が発達したことにより、文書をデータ化して保存することを可能にし、劣化する前の状態の文書を保存しておくことができるという利点も生じた。しかし、現在情報技術というものは日に日に進歩しており、データを保存している媒体が何十年後には使えなくなるという危険性もあることが指摘されている。現在私たちは1000年前の紙の資料を見ることができるが、データ化された資料の場合、1000年後は見ることができる保証はないと述べられている。

記録の電子化の問題点は、本編の中でも述べられているように、保存する媒体が日々進歩していくと同時に、媒体の種類により見ることが不可能なものも出て来るだろうということである。また、今現在問題となっていることとして「ポーンデジタル」がある。ポーンデジタルとは、最初から電子媒体として作成された文書であり、紙の文書が存在しないものである。本編で危惧された問題に加えて、ポーンデジタルの記録をどのようにして保存していくかという点も考えていく必要がある。

4章は、アーキビストが非現用となった記録のみを管理していくのではなく、現用記録の段階から、つまり記録の作成段階から管理していく提案を述べている。アーキビストが記録の作成段階から管理を行うことは、アーキビストがその記録の重要性を把握し、残していくべき記録の一貫性や連続性を構築していきやすくする。加えて、記録を作成する機関が大量の文書の山に埋もれることを防ぎ、且つ作業効率を高めることに貢献する。記録が作成される段階から関わり、どのような情報や記録を将来に残していくべきかを示唆することこそ、アーキビストの役目であろう。

5章は、民主主義国家の中でのアーカイブズの役割について述べている。民主主義の国家においては、国民が政府や組織の活動を把握し、知りたい情報を得ることができることが求められる。その際に必要となってくるものが、公文書等であり、重要な公文書等が保存されていることが政府や組織の説明責任や透明性を保証することになるだろう。また、

アーキビストが国際レベルで協力する必要性も述べられている。アーカイブズが直面している問題は、世界共通のものとなり、解決する共通の利益がある。本DVDを作成したICAは、アーカイブズの国際的な協力機関を代表する存在であり、アーカイブズ分野の全ての領域と機能において、幅広いネットワークを構築している。ICAは、アーカイブズ専門職の倫理規定を策定し、アーキビストの目的、歴史に対する誠実さ、法律遵守の原則などを世界中のアーキビストに発信している。加えて現在ではますます、地球規模で記録管理を改善していくための幅広い連携が必要となってきたのである。

2 ——— まとめ

情報社会の中でアーカイブズが果たすべき役割は多様であり、しかしながら根本的な課題は一貫しているということが本DVDの内容ではないだろうか。つまり、我々は如何なる記録を将来のためにきちんと残していくかという根本的な課題に対し、その保存方法や、現用記録の段階からの管理など、試行錯誤しながら記録を管理しているのである。情報技術が凄まじい勢いで発達し、グローバル化していく現在、アーキビストが取り組むべき課題は増え続けている。しかしながら、価値ある重要な記録が将来に残っていくかどうかは、アーキビストの手にかかっているものであり、このことは世界共通である。従って、ICAが訴えるように、われわれは世界規模でアーカイブズについて考え、より良い記録管理のために研究していく必要があるだろう。その際、言語のニュアンスの違いというものも考慮する必要があるのではないか。言語というものにはそれぞれの文化や風習や歴史が背景にあり、何かを認識したり、表現したりするときには、それらが影響している。従って、直訳して捉えてしまうと違うニュアンスとして認識してしまう恐れがある。そのようなことを避けるためにも、なるべく複数の言語を比較して、より正確に議論を認識していくことが世界規模でアーカイブズについて研究していく上で必要であることを今回、英語とドイツ語を読み比べて感じた。

1 ——— 書誌情報は以下の通り。Hausammann, Frédéric, and Conseil international des archives et al., *Archives, Mémoire Et Democratie Dans La Société De L'information = Archive, Gedächtnis und Democratie in der Informationsgesellschaft = Archives, Memory and Democracy in the Information Society*, S.I.: Manhaus Films, 2004.